



書評

[評者]

林 寛之

福井大学医学部附属病院
教授/総合診療部長

すぐ・よく・わかる

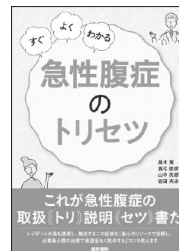
急性腹症のトリセツ

高木 篤, 真弓俊彦, 山中克郎,
岩田充永 編著

●B5 頁192 2020年6月

定価: 本体 3,800 円+税

[ISBN978-4-260-03945-1] 医学書院刊



「イレウス」は麻痺性イレウスを指し、機械的閉塞を伴うものは「腸閉塞」と呼ぶというように用語が統一されたのは、『急性腹症診療ガイドライン 2015』がこの世に出てからとなる。私のような古だぬき先生となると、何でもかんでも「イレウス」とテキストに呼んでいたから楽(?)だったが、確かに論文上ではほとんど“ileus”という用語は使われず、“bowel obstruction”と記載されていた。英語と日本語の齟齬が初めて正されたといえる。この急性腹症診療ガイドライン策定に陣頭指揮を執った真弓俊彦先生をはじめ、実に濃いメンバーで整合性がとれた内容の急性腹症の本が世に出たのは非常に喜ばしい。内容がアップデートされているのみならず、非常にわかりやすく、初学者にとっては重宝するテキストになるだろう。急性腹症とはとにかく鑑別が多く、頭の中で整理するのは大変なもの。

一般に腹痛のテキストを見ても、腹部の解剖学的な分割表に疾患名が羅列されただけのものが多く、病態生理を同時に考える本は少なかった。本書では内臓痛や体性痛が丁寧に説明されている。同時に解剖学的臓器を考えることで急性腹症の診断学力が飛躍的に伸びるだろう。腹膜刺激症状だけでは急性腹症は語れないのだ。「お腹が硬くないからこそ、怖い疾患」を想起できるかどうかは臨床医の腕の見せどころ。あくまでも診断は病歴と身体所見で8割想起可能であり、だからこそ疾患を予想して追加するCTの威力は抜群だ。一方、何も鑑別診断を挙げないで、「何でもかんでもCTさえすれば

放射線科医が診断してくれるからいいや」なんという不屈きな! (失礼)……安易な検査優先の診断学をしているのでは、簡単に「CTでは異常はありませんから病」なんて頼りない診断名でぐに巻くようになってしまうんだよね。

各論においては、図が多く、スペースがとってあるのがいい。各疾患の特徴をきちんと整理して理解しておくことが重要だが、このススイページをめくることができる感じになると、「あ、私って賢くない?」と自画自賛モードに入りやすい作りになっている。自信を付けたい初学者にはぜひともお薦めの一冊だ。

第3章「急性腹症の診断的アプローチ」は現場でのタイムリーな思考過程を身につけるためにぜひ熟読して自分のものにして欲しい。高木 篤先生、真弓俊彦先生、山中克郎先生のベテラン勢が同級生で、8年の時を経て本書が世に出ることになったという経緯は面白い。同級生だからこそ自由に意見交換できたからの統一性だろう。ここに年齢の違う岩田充永先生が巻き込まれたのは、「医学の世界のあるある」を見事に体現しており、読者の皆さまも「ああ、医者の世界ってそんなんだよなあ」と涙を誘われずにはられないだろう(あくまでも個人の勝手な想像です。いや、きっと岩田先生は嬉々として原稿を仕上げたことだろう)。日常臨床でスピード感を意識しながらアプローチできる実践書を皆さまの手元に1冊置いておけばきっと多くの患者さまが恩恵を受けるに違いない。